

## 保育と社会福祉を漫画で学ぶ

### ⑧『ハッピー！』 その2

迫 共  
(浜松学院大学)

波間信子さんの『ハッピー！』は、中途失明した香織と盲導犬ハッピーの物語です。香織と獣医師である旦那さんの昇とのあいだには、息子、明光（あきみつ）がいます。明光は2歳、ふだんはハッピーと香織といっしょに保育園に通っています。第11巻、第55話「明光のハッピー」では、明光の通う保育園が運動会の時期を迎えています。園児たちも保護者も皆が楽しみに待つ運動会。そのはずですが、香織にとってはどうやら事情が違うようです。

「運動会って見えない。音にもおいも遠すぎるし多すぎるし、さわれないし、説明されてもちよっとしか見えない…。香織はふさぎ気味です。実際のところ、たくさんの歓声に、先生たちの実況中継と、運動会の日には耳からの情報が多すぎて、視覚障害者にはつらいものがあります。

香織はハッピーのワントゥ（排便）を口実（かりげ）に家族のレジャーシートを離れます。物陰で「見て楽しむ日なんてキライ… 見て成長を喜ぶ日なんていらぬ」といらだつ香織。ハッピーはそんな香織をなだめるようにおでこをこすりつけてきます。

午後の最後のプログラムは「ないしょないしょゲーム」。内容は秘密です。香織がシートにもどってきたとき、司会のアナウンスが響きました。「お父さんお母さんに、『ないしょ』にしたタイトルを、みんなで大きな声で、せーの！」

園児たちの声が響きます。「みんなハッピー！」

年中・年長児の保護者が一人ずつ入場門に集められ、香織も園長に呼びかけられます。全員が目隠しをさせられての障害物競争が始まるのです。しかも子どもたちみんなが盲導犬ハッピーの役になりきって親たちの手を引くという競技です。

「早い者勝ちじゃないですよ。ぶつからないで転ばないで、ゴールしてくださいーい！」というアナウンス。園長はハッピーにお手本を見せてくれないかと頼み、盲導犬として障害物をよけながら、香織をエスコートする様子を保護者たちの前で披露します。

「ハッピーの大事なお仕事邪魔をしないように静かに見てください」とのアナウンスが客席全体に呼びかけられます。ハッピーには簡単すぎるコースですが、子どもたちはどうでしょうか。司会の先生の気遣いは見事なもの。

『子供たちハッピー』は盲導犬になりたてのホヤホヤです。失敗してもお父さん、お母さん、笑って許してね」と呼びかけています。

競技が始められます。へっぴり腰で子どもに手を引かれる保護者たち。子どもたちは、自分は障害物をよけられても、どうすれば親が障害物をうまくよけられるか分かりません。そこらじゅうでコーンや標識、立てかけられた毛布などの障害物にぶつかり、うろたえる保護者たち。ゴールに着くと香織の大変さ、ハッピーの賢さが身に染みてわかる、という競技です。

明光は2歳。この競技には参加できないはずでしたが、「あきもしゅるの！ ハッピーのおしおと（あきも、ハッピーのお仕事するの）！」と言い出します。

様子に気づいた園長が機転を利かせて呼びかけてくれました。「明光くんは2歳で小さいけれど、ハッピーのお仕事を生まれた時から見てきました。明光くんのお母さん、ハッピーの『弟ハッピー』を信じて歩いてみませんか？」

ハッピーはハーネスを外してもらって休憩に入ります。「自分の仕事を子どもに取られた」と思わせないための配慮です。

スタートラインに立つ香織と明光。明光は黙って香織の顔を見て、合図を待っています。保育士は「すっかりハッピーになりきっているんだわ」と感心します。

「明光、ストレイトゴー」と、香織はいつものように言います。

工事標識の前で立ち止まる明光。「工事のところでちゃんと…グッド」と香織。明光は無言のまま得意げな笑顔を見せ、コーンをすり抜けていきます。

毛布の前でも明光はしっかり立ち止まり、香織が手で確認するのを確かめます。「嘘…あちこちにぶつかっては泣いてる明光が!？」と驚く香織。

信号機と自動車役の保育士が待つ横断歩道では、無言のまま段差を指摘し、信号が変わったのを見計らって香織をエスコートします。横断歩道が終わって歩道に入るところにも段差があり、立ち止まって香織が確認するまで、明光は待っています。

「いつの間に明光おぼえたの…？ ハッピーみたいよ。たった2歳で」と驚きを隠せない香織。ゴールまで到着してチリンチリンと鈴が鳴らされ、保育士から声をかけられます。「ハッピーそっくりにお母さんを見あげて、ほめられるのを待っていますよ」。

香織は明光に顔を近づけ、「グッド。ナイス、明光。よく見えるいい目々ね」とほめると、明光は「いいめめよ、みてたのよ、うれちーの。おかーしゃんうれちーの。ハッピーうれちーの。あきもうれちーの」と満面の笑顔です。母親である自分を守れるほどに育った明光の成長を感じ取り、香織も涙を流して明光を抱きしめます。

「このプログラムの発案者は、年中、年長の子供たちです」と司会のアナウンス。「ぼくたち私たちもお母さんお父さんを助けたい、ハッピーをしたい」「助けたい心、守りたい心を、ハッピーが子供たちの中に育ててくれました」…。

障害を持つ人の困難を理解することは簡単ではありません。一時的に見えなくなっても、また見える状態に回復するならば、それは障害ではありません。回復が望めないから障害なのであり、その苦悩と絶望を抱え続けて、生きていかなければならないことが障害を持つ人の困難なのだとなれば、健常者は障害者の生きる世界を、絶対に理解しえないのだと思います。

しかし「理解しよう」と努力すること、そして「助けたい、守りたい」という気持ちを働かせることは決して無駄にはならないと考えます。

他者が生きる困難を理解しえないことは、実は障害の有無にかかわらないことです。誰も完全に相手の立場になることはできない。でもなろうとして共感を働かせようとする心が育たなければ、私たちは顔を合わせていても、本当には他者と出会うことができないのではないのでしょうか。

「明光のハッピー」はフィクションです。ですが、明光や香織の様子を日常的に見て、自分や自分の家族とは違う困難を生きる大人や、それを助ける盲導犬の存在を知った保育園児が、その困難をともに感じ、ともに生き、身近な大人とともに体感できる競技を発案するというこの物語には、心を打たれます。それは単なる感動というだけではなく、共に苦勞を背負い、ともに生きる、対人援助職に求められるあり方を示されているようにも思うのです。